

# うきたむ

第7号

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

1996. 5. 10

山形県東置賜郡高島町大字安久津2117 TEL (0238-52-2585)  
FAX (0238-52-4665)



味噌根窯跡の発掘 (1995. 10. 22)

## 味噌根窯跡から見えるもの

本館運営協議会委員  
高島町郷土資料館館長

山崎 正

三内丸山遺跡の発掘調査によって、「ぬりかえらるる縄文のイメージ」ということが強くアピールされるようになった。同時に「年輪考古学」など自然科学的方法が急速的に導入され、一方では「人類考古学」といった社会科学、民俗学及び（文献）歴史学などとも関わり、考古学の概念も進化拡大されつつあることは周知の如くである。

昨年秋の終わりに、考古資料館裏手の味噌根山麓で、八世紀の窯跡群が確認され、円面硯ほか、坏、小壺など多数の土器片が出土した。私がそこで見たものは、炭化した、いわゆる木炭状の遺物であった。同伴者は年輪の生成幅からみてナラだと言い、他の一人はマツではないかということだった。ナラもマツも火力が強いので、味噌根窯でも燃料として大量に使われていたに違いない。何れにしても、ナラ、マツなどの広々とした落葉と常緑の混成林がここにはあって、多くの人々の力によってその木が伐採され、土器が焼かれたのであろう。

その土器の一つ円面硯の出土は「三里（およそ百五十戸）をもって小郡となす」という近くの小郡山郡衙説を説明するかと思う。が何よりも、今様の森林伐採による環境破壊などおおよそ考えられない。粘土をこね、木を伐り、土器を焼いた当時の人々の息遣いや物語が一つの炭化遺物からイメージ豊かに伝わってくる、いわば「情緒的考古学」といったもの一つの視点が見えればいいのだが。

やきもののルーツをさぐる

# 「山形県の古代窯業遺跡」

## 第五回企画展開催

いまわたしたちのくらしの上で、陶磁器は食器としても貯蔵具としても欠くことのできないものとなっている。この陶磁器の直接のルーツは、古代の窯業である。そこでつくられた「須恵器」は、一二〇〇年前に山形の地にも出現する。このたびの企画展は、この古代窯業にスポットをあててみた。

### 古代窯業のはじまり

ロクロで形をつくり、登り窯を用いて一二〇〇度の高温で焼成する須恵器は、五世紀前半に朝鮮半島から渡来した人たちに

よって伝えられた。

はじめは近畿地方で製作されていたが、硬質で金属的な趣き

は、当時の上層の人びとにきそって受け入れられた。

灰黒色や灰白色の器色は、登り窯のなかを高温の還元焰によって焼成することによる。

### 展示の状況

山形県内でこれが生産されるようになったのは、この地域に国家の力が伸びて、律令体制にくみ入れられるようになった八世紀初めであろうと今のところ考えられる。高島町・ソネ窯跡や米沢市木和田窯跡がもっとも古く、そこから出土した資料がはじめて公開される。

### 窯業生産のひろがり

八世紀の後半には、置賜に大神・壇山窯跡、村山に上山西部丘陵窯跡、庄内に鶴岡市荒沢窯跡などが出現し、県内全域にひろがりをみせる。

これらはいずれも国府や郡衙など役所の庇護をうけた官窯であった。九世紀にはこれが最高潮に達し、寒河江市平野山、酒田市東部丘陵などに一〇〇基を越えるような大窯跡群が形成される。

平田町・酒田市・八幡町・遊佐町の丘陵地帯に分布する窯跡群は、当時の国府であった酒田市城輪遺跡に関連をもつものであった。

### 古代窯業のおとろえ

こうして県内に八〇余り確認されている古代の窯場も、一〇世紀後半に律令体制がおとろえ、国の役所の力が弱体化するにつれて衰退にむかうようになる。窯業生産の盛衰のなかに、古代の政治や社会の状況をよみとることができるのである。

燃料がとほしくなった

ことや木器の普及などもこれに拍車をかけることとなる。

しかし東北地方でも、福島県大戸窯、宮城県白石窯のように、瀬戸や常滑などの技術を取り入れ、中世窯に転換したところもあった。県内では今のところ中世窯業遺跡はきわめて少ない。

県内の古代窯業遺跡から発見された土器類を一堂に集め年代ごとに展示するのは県内初めての試みである。土器類の他に、置賜や庄内地域出土の陶硯類、酒田市城輪遺跡出土の瓦類なども展示されている。

この展示は、七月末日までである。



登り窯のジオラマ

### 特別講演会のお知らせ

企画展にちなんで、次の講演会が催される。

○日時 六月八日(土)午後一時半

○「東日本の古代窯業生産と流通」 国立歴史民俗博物館 教授 吉岡康暢氏

○受講料 七〇〇円

本館へ電話でお申し込みのこと。



# 魅力ある多彩なイベント

## 考古の世界にひたる

### 今年度事業きまる

#### 秋は「押出遺跡展」

今年も本資料館主催の行事が多彩に開かれる。昨年発足した「うきたむ考古の会」との共催事業もあり、ぢかにみて、聞いて、体験して考古の世界にふれ、これからのわたしたちの生活の糧にしてい

- 第三期 考古学入門講座  
「遺跡を掘る」パート1  
旧石器時代から戦国時代までの遺跡発掘の話を一〇回にわたり各講師から聞く。  
七月一日～二月一日
- うきたむ縄文体験教室  
・土笛土面づくり  
六月一日
- ・土器づくり  
七月一日
- ・縄文月見の宴  
九月二日
- ・編み布づくり  
二月二日
- 三内丸山遺跡と亀ヶ岡文化を訪ねる  
六月一日～二日（バス利用）  
下小松古墳群他  
五月一日
- 夏休み親子遺跡探検  
八月四日  
稲荷森古墳他  
十一月一日
- 秋の遺跡めぐり  
十一月一日



昨年の土器づくり教室

他に共催事業として東北中世考古学会第二回研究大会が本館を会場にして開かれる。また昨年度実施した味噌根窯跡群の発掘調査も、今年度第二次が実施されることになっている。これらの事業についてはどなたでも自由に参加できる。詳しくは本館の「催しもの案内」を参照するか、直接お問い合わせのこと。

## ミソネ窯の報告書 「うきたむ考古」創刊号 など発刊

本館の北側どう園のなかにある味噌根古窯跡は、昨年一〇月から二月まで二か月にわたって発掘調査が行われ、これまでに二基の窯跡本体が掘り出された。引き続き今年度も調査が行われるが、昨年度の調査成果をまとめた「味噌根窯跡群第一次発掘調査の概要」がこの程発刊された。

またうきたむ考古の会の会員が参加して作っている「うきたむ考古」創刊号もこの度刊行される。これには一三名の方が投稿されているが、だれでも気軽に読める新しいタイプの考古の雑誌をねらっている。

A4判、二、三頁で、頒価五〇〇円。  
A5判、六〇頁で、頒価五〇〇円。  
いずれも本館で購入されるか、本館へ申し込まれる。

## 東北中世考古学会

### 八月下旬に開催

最近とみに中世の考古学への関心が高まってきたが、昨年一月本館を会場に、東北地方の研究者七〇余名が集い結成された東北考古学会の第二回研究大会が今年も開かれることになった。

○期日 八月二十四日(土) 午後二時～五日(日)

○会場 本館研修室

○講演  
国立歴史民俗博物館助教授  
小野正敏氏  
「中世陶器の生産と流通」



# 「古代の丘」と長者屋敷遺跡

— 長井市西根地区 —



長者屋敷の復元住居

長井市街から北西へ六キロ。雄大な朝日山系の葉山連峰が眼前に連なる。西根小学校のそばから車で七〇〇メートル、山の方へ向って走る。

平地にむかって山側から張り出した丘陵上に長者屋敷遺跡があり、四棟のかや葺きの復元住居が目につく。このあたりの山麓一帯、勸進代、草岡・川原沢な

どは、古くから土器片や石器が出るところとして知られていた。長者屋敷に発掘調査の鍬が入られたのは、一九七七年（昭和五二）で、その後八一年まで

長井市教育委員会により三次にわたって調査が行われた。この調査の指導にあたったのは、茂吉文化賞を受賞された今はなき佐藤正四郎氏であった。氏はこ

のあたり一帯を自然を含めた縄文や古代の公園にする荘大な夢をえがいておられた。それがいま実現したのである。

長者屋敷には、一万数千年前の後期旧石器時代から人びとの生活の場であった。杉久保型ナイフが発見されている。その後縄文早期末の表裏に縄文のある土器片も出土している。そして台地東側から縄文前期初頭の隅丸方形の堅穴式住居が発掘されている。

もっとも栄えたのは、縄文中期末葉で、巨大な複式炉をもつ直径五メートル前後の堅穴住居が一二棟掘り出されている。そのうちの一号住居跡が覆い屋の中に保存されている。四〜五棟の住居が円弧状に並び、中央には広場がありまたこの集落の近くには土拵墓群や川原石をしきつめた配石遺構があり、墓地や信仰の場であつたらしい。

縄文晩期末葉の堅穴住居跡もこの北東部から三棟検出されている。これらは円形に配列された石囲炉を伴う大型の円形住居跡であった。また台地の東側からは、弥生中期の土器を伴って再葬墓が見つかっている。

長者屋敷遺跡は、後期旧石器時代から弥生時代まで一万数千年にわたって人びとの生活の場

であった。山の幸にめぐまれたこのあたりは古代人にとつて絶好の生活の場であつたのだろう。

道路をはさんで北側には、古代の丘資料館があり、長者屋敷はじめ長井市内から出土した遺物が展示されている。タイムト

ンネルを抜けると堅穴住居があり、縄文時代へタイムスリップする。縄文時代の遺物をはじめ河井山古墳群から出土した古墳時代の遺物などを見ることができ

る。さらに橋を渡って北側の台地には連山を背景にストーンサークルを模倣した野外展示の広場、日本各地の土偶を並べた土偶の丘があり、十数体の大きく復元された土偶が林立している。

またこの上方には、梨の木平縄文村があり、堅穴住居が五棟並びキャンプや体験学習に利用されている。

毎年初秋に催される「縄文まつり」には、地域の人びとによる「縄文大鼓」の演奏などがあ



土 偶 群 像

り、かがり火を囲んで縄文食に舌つづみをうち、縄文の音に耳を傾けると、遠い原始のロマングがよみがえってくる。

今年もこの「古代の丘」を会場にして、すすきが穂を出し月見草が花をつける初秋に「縄文まつり」が盛大に行われるという。

